

ナンガ・パルバット登攀

坂井 広志

1. 登山隊の名称

千葉工業大学ナンガ・パルバット登山隊1995

2. 目標の山と登山ルート

ナンガ・パルバット (8,125m) を北面新ルートより登頂後、西面を下降

3. 登山結果

坂井広志, 矢部幸男, 秋山武士の三名が北面新ルートからの登頂に成功。

「C.I.T. JAPAN ROUTE (千葉工業大学ルート)」と命名

しかし、当初の目的の西面側への下降は断念した。

4. 登山期間

1995年6月8日～7月29日、ベースキャンプ設営から撤収まで52日間

5. メンバーリスト

隊長・タクティクス	坂井広志	38才
医薬	藤井正善	48才
タクティクス補佐	寺本正史	47才
装備・環境	矢部幸男	29才
渉外・会計	平田 潔	28才
記録・気象	石井 渉	29才
食糧	田村恵一	28才
装備・環境	秋山武士	26才
食糧	上坂隆幹	25才
輸送・通関	岩本 崇	22才

6. はじめに

ナンガ・パルバットに登りながら常に私の心の底に流れていたのは、100年前に初めて挑戦したマリーであり、単独初登頂を果たしたヘルマン・ブール、ここでなくなった数多くのドイツ人たちのことでした。彼らが持っていた山にかける深い思想、激しい情熱、勇気、を自分を含めてメンバーが持っているのか・・・でした。自分なりにこの山にはいるには周到にして完璧なる準備をやってきました(1992年偵察より三年間)。しかしナンガ・パルバットという山はそれだけでは登れないとても巨大な相手だと当初より感じていました。人も山も自然の造形物です。それからすると人に人格が

1. 登山の記録

あるように、山にも格があると私は思います。この山には偉大な格とスケールがある。ナンガ・バルバットを相手にするには彼らが山にかけたと同等なる深い思想、激しい情熱、勇気がどうしても必要でした。技術・装備・体力・高所登山の科学的分析など初期の登山技術に比べ現代登山テクニックは格段に進歩を遂げています。これらを駆使しても難しい相手だったことを隊長として私は登山期間中痛感いたしました。ナンガ・バルバットは登頂を目指す我々にルート上、次々と物理的障害を立て阻みますが、逆に私たち人間側の、障害を乗り越える可能性を引き出させようとしているようにも思われました。そう感じたとき山と人間との間に何か精神の一体感ができ、登頂への道が開いてくるようでした。

一単科大学の山岳部OBを主体として組織され、決して大きい登山隊でなかったが故に、すべてが登山隊独自の発想・企画と運営のもとに実行されました。二度の落石事故により当初の計画であった登頂後の西壁側へのトラバース下降はできませんでしたが、新ルートから三名の登頂成功で、私たちは主体性のある創造的登山という哲学を、貫き通したと確信しております。

7. ルートの選択について

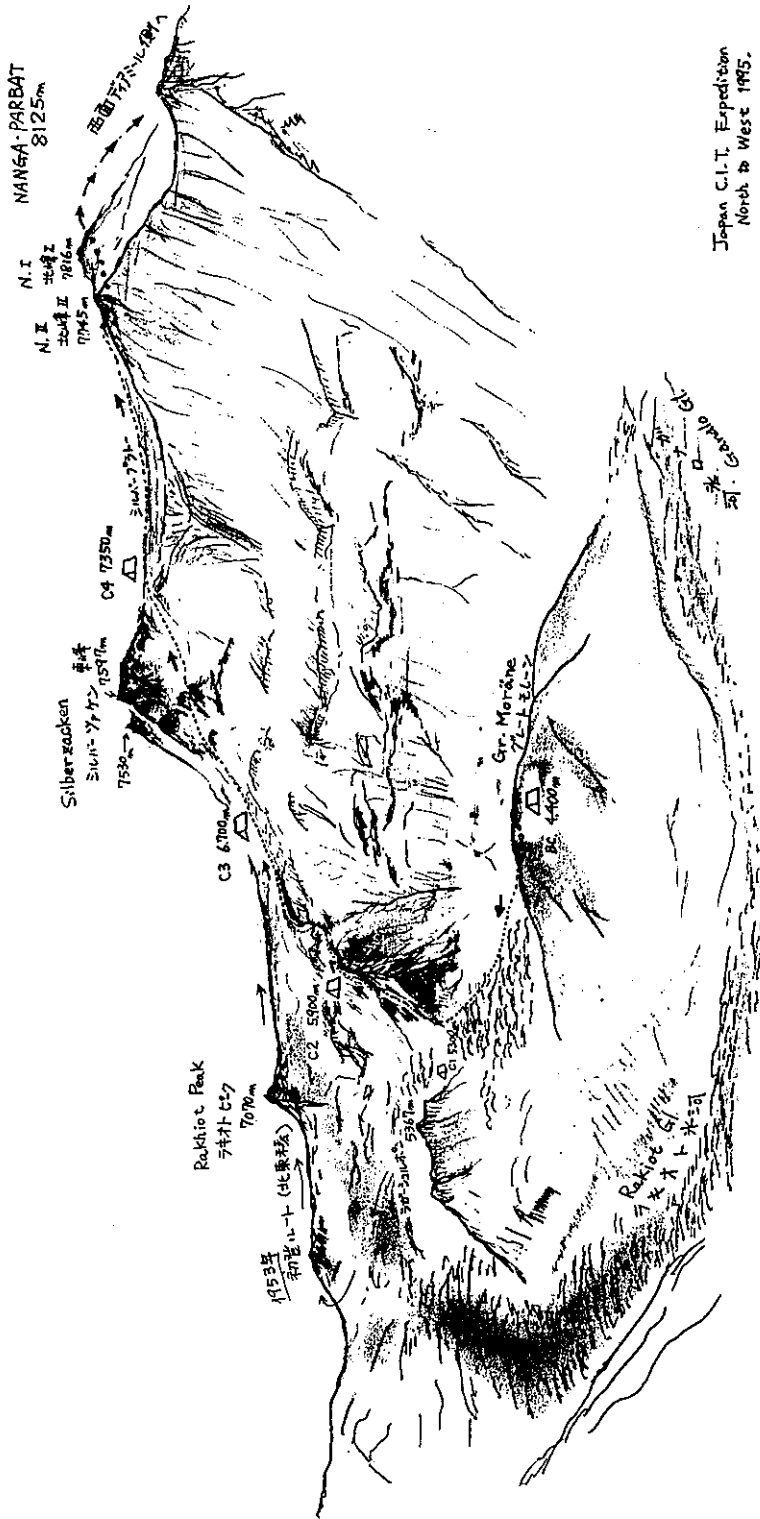
ナンガ・バルバットに初めて登頂を試みたのはアルピニズムの先駆者A.F.ママリーである。彼は1895年この山のルバル側、ディアミール側と登路を探るが当時の技量からして登れるルートではなく、最後にラキオト側に入るべくディアマコルに向かいそのまま消息を絶ってしまう。1995年はママリーの初挑戦からちょうど100年目となった。今日までに数多くの登山隊が挑んでおり、その歴史には初登頂までに、多数の遭難者を出したことで有名な山である。

ナンガ・バルバットに開拓されたルートはこれまでに6本ある。(1)驚異的な単独行を成し遂げた初登者、ヘルマン・ブルのたどった北面ラキオト氷河より東稜を経たもの、(2)西面ディアミール側には現在最もポピュラーになっているドイツ隊のルート、(3)同じく西面側、ラインホルト・メスナーが単独無酸素アルパインスタイルで登ったルート、(4)南面ルバル側の壁の標高差4,500mの南南東側稜ルート、(5)同じく南面ルバル側の南西稜ルート、(6)東面バツィン側の急峻な南東側稜がある。

この開拓された6本のルート以外にもいくつか挑戦されたルートはあるが、この山のむずかしい要素から登頂には至っていない。さらに西面のドイツ隊ルート以外は再登の回数も少ない現状である。今回私たちが登頂した北面については1953年の初登頂、1971年にチェコスロバキア隊が登頂した以外、入山した隊はあったものの登頂には成功していない。

今回の新ルートが登れそうに感じられたのは今から十数年前のことである。ギルギットに向かう機中から北面を見た際にシルバーツァッケン東峰より北に落ちるかすかな尾根に注目し、もしここが登ればシルバープラトへ簡単に抜けられる、ヘルマン・ブルがたどったルートは大変長い、それをショートカットして登れば・・・と思った。帰国後暇を見てはナンガ・バルバットについて資料を集め調査を始める。幸いこの山は登山開拓期に北面側に数多くの登山隊が入り詳細な文献があった

NANGA-PARBAT NORTH FACE
 ナンガ・パルバット北面ルート図



Japan C.I.T. Expedition
 North to West 1955.
 by H. SAKAI

1. 登山の記録

うえ、メルヘン・ヴィーゼ（北面ラキオト側のキャラバン地で大変美しい牧草地、おとぎの森という意味）付近からの写真をはじめいろいろな角度より撮った写真が豊富にあり参考になった。また1992年の私の偵察行後は、川崎教員隊の坂原様（1983年に初登ルートに挑んだ）より北面に関する写真資料やアドバイスを頂いた。

このルートに関する情報を集めた結果、ルート上のポイントは何なのか、また成功させるための条件は何かを分析してみた。

ルートのポイントは次の三点

- (1) C1からの取り付き岩壁帯（標高差約500メートル）とC2上に立ちはだかる懸垂氷河（標高差約100メートル）の通過。
- (2) BCをグレートモレーンの上（通常3,900mにおくBCを4,500mとした）に設置した場合、頂上までの水平距離は9.3km、垂直距離は3.6kmある。この高さや距離をいかに安全に通過できるか。
- (3) シルバープラトーの平らで長い雪原の通過と登りルートでない西面への下降。

(3)の西面下降は登頂後に早く高度を下げるのが安全につながると考え、また西壁のドイツ隊ルートならばルート資料も多く、サポート隊を下から送れば下降も可能と判断したからである。未踏ルートからの登頂だけでなく、西面への下降を加えることにより、さらに自分たちの登山に課題と意義をつけ加えることとした。そのため計画上、登頂後に西面へ縦走した場合には水平距離16km以上という長距離となる予定だった。

8. タクティクスの計画と結果

(1) 偵察

ナンガ・パルバットに関する資料は多いものを目指すルートは未踏のルートである。実際に自分で現地確認することは登山計画の確認と安全の向上につながると考え、私が1992年に、藤井隊員が1994年にベースキャンプ予定地まで偵察に行ってみた。その結果C1からC2間の岩壁帯とC2上の懸垂氷河に登路の可能性はあると判断した。それまでこのルートに関する私の疑問は、なぜ初期の頃のドイツ隊は私たちの狙うルートを選ばなかったのか、であった。ヘルマン・ブールの登頂までに北面に入山したドイツ隊は四隊、緻密に調査し執拗に北面に入りながら最初に挑戦したルートしか選んでいない、その上初登までに31名もが亡くなっている。偵察の結果、彼らが選択しなかったのは当時の登山技術からして取り付きの岩壁帯は急峻で隊員たちが登るにも、またポーターが荷揚げするにもあまりにも難しいと感じたからだ、と結論づけた。ヘルマン・ブールの著書「八千メートルの上と下」にもこの取り付きの岩壁帯の記述はなく、ルート対象外としていたようだ。さらに私たちはパキスタンの登山家ナジール・サビール氏にルートの航空写真を撮っていただきルートのポイントについてより詳細に調べることができた。

1. 登山の記録

このような偵察情報はタクティクスを作る際に大いに役立つ登攀具の積算やキャンプ配置高度等、予測はほぼ予想通りだった。

(2) キャンプ配置とルートの概要

ア BC (4,500m) まで

過去の登山隊は標高3,900mの牧草地をベースキャンプに、標高4,500mの通称グレート・モレーンの上をC1にしている。私たちは頂上までの水平距離の長さを考慮し、ベースキャンプはできるだけ上にしたく標高4,500mのグレート・モレーン上をBCとした。BCを設営した六月上旬は約三メートルの積雪（七月末にはほぼ消えた）があった。ここは丘状の地形のため北壁からの雪崩の心配もなかった。BCへの荷揚げは選ば抜いた約二十名の強いポーターに長靴とサングラス等を支給し隊員と共に六日間の荷揚げを行った。

イ BC (4,500m) からC1 (5,300m)

ラキオト氷河を登る。北壁からの巨大な雪崩が時々ある。初登のルートと同じ。

ウ C1 (5,300m) からC2 (5,900m)

雪稜のテールリッジより取り付けの岩壁帯にはいる。平均斜度は約60度で数カ所は垂直、この付近は日差しが当たると同時に落石が発生。中間部は特に危険地帯で隊員2名が落石事故でリタイアする。5,700mに仮C2を設営、これよりC2へはナイフエッジの雪稜に変わる。

エ C2 (5,900m) からC3 (6,300m)

C2上に約100mくらいの高さのアイスビルディングがあり、この中央部を突破する。垂直な硬い氷であった。C1のテールリッジよりこのアイスビルディングを抜けるまでフィクストロープはべた張りとなった。アイスビルディングを抜けるとやさしい尾根へと変わる。

オ C3 (6,300m) からC4 (7,350m)

シルバーツェッケン東峰の基部を巻き、シルバープラトーにでるが、途中急なミックス壁のトラバースと垂直な岩壁がある。

カ C4 (7,350m) から頂上 (8,125m)

シルバープラトーは幸いくるぶしぐらいの雪の深さで速いペースで歩けた。パツィンムルデに一旦下り、頂上岩壁帯のルンゼに入るが途中で垂壁に阻まれ左にエスケープ、ニピッチザイルを使用後、北の肩直下の稜線にでる。その後はやさしいが長く苦しい岩稜をたどって頂上へ。

(3) 天候と登山時期

今回の成功にまず挙げられる条件として天候の安定があった。BCへ荷揚げを開始した六月初めより一気に好天期が始まり、七月中旬まで悪天による停滞日がたった一日だけという恵まれた年であった。ナンガ・パルバットは天候の悪い山として有名である。日本での準備の時は、いかにして天候を察知すべきかいろいろと方策を練った。気象ファクシミリによる高層天気図のキャッチと

1. 登山の記録

BCでの自記記録計による各種気象データの測定を計画したが、機械操作の不備もあり、結果的には現地では全く役に立たなかった。もし、しっかりとデータが取れていれば、なぜこのように天候が安定し続けたかの解明できるデータが得られたであろうと思う。また過去の登頂者達の登頂日もかなり幅があり、いつの時期が登山に適しているのか、なかなかつかめなかった。ただルート上の取り付き岩壁帯（C1からC2の間）は時期が早い方が雪が多く、登りやすいのでは、と考えた。そのため登山時期を六月上旬開始と設定し、登頂を過去の記録からモンスーンの影響の現れる七月末までにとした。

(4) 高所順応

私たちは昨今の短期速攻で登頂をする隊ではないので、じっくりと高所順応をすることにした。しかし登山期間は長くとも二ヶ月が精神的にも肉体的にも限度と考えた。まず4,000mラインはBCへの荷揚げで幾度も往復し、順応させた。その後は各自の体調をよく観察し、順応が十分でない場合は速やかに下のキャンプに下げさせた。また初めて上がった高度で宿泊はしない、上部キャンプでは極力休養日は入れないこととした。さらに十日間から二週間をサイクルにBCにて十分に休養を入れた。特に最終ステージとなるアタック前はBCで四日間の休養をすることにした。最も高所順応で注意を払ったのはC4（7,350m）入りであった。アタックにワンビバークは必要である。七千メートルラインを超えての宿泊数を少なくするには天候と隊員の体調を見計らってC4に入り、速やかにアタックをかけることだった。今年の安定した天候にもよるが、結果はほぼ満足できた。高所経験者の少ないメンバー構成だったため無理せず慎重に行ったせいもあるかと思う。そのため体調を崩したための、タクティクスに関わる大きな変更はなかった。しかしアタックメンバーのうち一名は頂上付近で幻覚を見たうえ、下降中に肺水腫の疑いのある兆候があった。幸い下るに従いその症状は消失した。

(5) 酸素

八千メートルを125m超えているだけなので、順調に高度順応すれば酸素は不要と考えた。しかし緊急用として三本のボンベをC4にあげた。アタック後にC4に戻ったメンバーのうち、体調のよくないものには一本吸わせた。行動用としての酸素は使用していない。もともと私たちは全員登頂を目指してはおらず、登頂は実力のあるメンバーによるワンチャンスくらいの難しい山ととらえていたため必要最小限の酸素量とした。

(6) スキー

長いシルバープラトートの通過にはスキーの使用は有効なのではと考え、山スキー（160cmの板）を用意した。結果はこのスキーを持ってC1からC2の岩壁帯をあがるのは不可能に近く、断念をした。C4からのシルバープラトートは雪面は堅くスキーの必要性は感じなかった。

1. 登山の記録

(7) GPS (グローバル・ポジショニング・システム)

スキーと同様、結果的には使用しなかったが、精度と軽量さがあれば今後積極的に使われても良いものと思う。事実、アタックの帰路、シルバープラトーでホワイトアウトになった際はコンパスだけでは不安であった。方角と距離の表示されるナビゲーションシステムがあればどんなに安心できるかわからない。

(千葉工業大学ナンガ・パルバット登山隊隊長)